二編より成り、各編更に細目に分つてあるが、其内、各大學の項では教室、研究室、閲覽室、製圖室等の配置及び室内の諸設備、教授助教授等の近狀、其の講義並びに學生の指導振り等を綿密に視察して夫を詳細に記述し、第十一編では英獨に於ける各教授の地理教授方法を紹介し、第十二編は全體の結論ともいふべきもので、研究室の設備の善いのは獨逸では伯林大學、ライプチヒ大學、佛蘭西では巴里大學、英國ではケンブリヂ大學であつて、各國の地學協會、博物館も地理的智識の養成と向上に貢献してゐる。歐洲に於て地理學界の賑かなのは一般の思想が世界的であるから從つて世界を研究の目的とする地理の發達を促し、其の隆盛を來したのである。亞米利加に於ては地理學が一方に於て極端に微々たる狀態であるに反し一方に於ては極端に盛であるのは夫が新開地で最初地理學を餘り重要視しなかつたのを現今覺醒し來つた爲である。我國に於ける地理學界の現況は未だ充分ではない。此の學の文科中に設置されてゐるのは歐洲の昔の時代か、北米の覺醒以前の狀態にあるものとしか考へられぬ。圖書館博物館は地理の研究に貢献する事が少く、研究室の設備も充分でない。地圖の利用も幼稚で、從つて地圖の出版も困難な狀態である云々と述べてある。本書は最近歐米地理學界の狀況を知らんとする人々に恰好の書で、新たなる留學者には見學の指針となり、又教室研究室を設備せんとする際の參考にもなるものである。（四六版二六三頁、東京古今書院發行、價一・八〇）〔以上松野〕

◎鷄龍山麓陶窯址調査報告

神田惣藏
野守健

朝鮮總督府昭和二年度古蹟調査報告の第一冊をなすものである。鷄龍山は忠淸南道公州郡に所在する無名の山であるが近年この山麓に多くの陶窯址が發見され簡素雄健にして雅味ある製品を夥しく出土せしめた爲に俄然世の視聽を惹くに至つたものである、本報告に於ては先づ陶窯址の所在地と現狀を見次いで發掘と出土品を述べ陶窯の構造と陶器の種類及發見陶器の年代を論じて居る。それによると陶窯の構造は所謂登窯にして隔壁によつて數室を區劃したるもの、陶器の種類に至つては三島手、

刷毛目、繪三島、彫三島、黑釉、白磁ありその年代は刻銘の研究より正に李朝初期恐らく太宗以後のものならんこした。思ふに朝鮮陶磁史は新羅燒に於て堅實なる基礎を固め高麗燒に於て華麗なる花を開き李朝初期に至つて最後の光輝を放つものであり人或はこの最後の光輝を以て朝鮮陶磁史全體を光被する價値ありこなすものもある、而して鷄龍山の遺物は正にその時期を代表すこいふも過言ではない。然らば本報告が朝鮮陶磁史研究家にこつていかなる價値を有するかは言はずして明かであらう。數十葉の實測圖。コロタイプ圖版等は最多くこの目的を助けて居る。なほ附錄こして現在朝鮮に行はるゝ各種陶窯の構造を說いてあるのも遺跡の理解によき參考こなるであらう。（四六倍判、本文五一頁、挿繪三十四葉、圖版八十一枚、朝鮮總督府發行、非賣品）〔肥後〕

▲義公史蹟行脚　弓野國之介著

著者は鄉土史研究の熱心家で、昨年德川光圀生誕三百年記念會が擧行されるに當り、此の偉人を景仰する一念から親しく彼の史蹟を巡歷し、其の調査し見聞するこころを、いはらき新聞紙上に百餘回に亙り連載したが、今回それを增訂の上單行本こして世に出だされたのが本書である。光圀の足蹟を印せる範圍は概ね水戸領內に留まり、領外では小川、潮來より房總半島を橫斷して海路三浦半島た上陸し、鎌倉より藤澤まで行つた事、其他では笠間、筑波、日光、小金等が主なる所であつて、著者は是等の史蹟及び光圀の足蹟は無いが湊川楠公碑や多賀城碑の如きまでをも尋ね、其他牧畜植林等の事業、孝子節婦表彰の蹟等に就ても出來るだけ探究し、之に當時の史實を附して彼の偉業を顯彰するに努めてある。記述の體は引用文の原漢文なるを和文になほしてあるのもある位の通俗を主こして、行脚的紀行文を加味して興趣多く書かれてあつて、讀者は本書により此の偉人を更に景仰する念を起すべく、國民思想の善導に資するこころが尠くなからう。（四六版四一二頁、水戸弓野氏發行、價三圓）